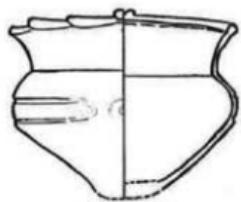




馬場川遺跡 II



(S地点出土縄文式土器)

1971.3

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市教育委員会
教育長 益倉辰次郎

各種の開発事業による埋蔵文化財包蔵地の破壊と保存をめぐる問題は、社会的な動向として関心が寄せられるようになりました。数多くの埋蔵文化財包蔵地をもつ大阪府下においては日々の度合を加えています。

こうした現状の中で、本市では昭和44年度より5カ年計画を立て、市域に所在する埋蔵文化財包蔵地の周知徹底、事前協議体制の確立、範囲確認調査の実施など、その保存対策を進めています。

本市横小路町に所在する馬場川遺跡は、府下でも数少ない埋蔵文化財の遺跡であります。宅地や工場用地として次々と失われて行く現状から、昭和44年度に国庫および府費による補助事業として発掘調査を実施しました。その結果、出土遺物の量とその豊富さにおいて西日本では稀有の遺跡として注目を浴びることになりました。

遺跡の確認は相当のひろがりをもつことがわかったため、昭和45年度も継続して調査を行なうことと計画しましたが、幸い、続いて同庫・府費補助金の交付を受けることができ、昭和45年7月から12月にかけて総額80万円の事業として調査を実施しました。

天下の作業につづき、資料の整理に従事下さっている調査員ならびに学生諸君のご労苦と、関係各位のご協力に対し、ここに記して感謝の意を表します。

例 言

1 この語は、昭和45年度文化財保護事業として、国庫および府費の補助金を得て実施した、東大阪市横小路町3~4丁目に所在する馬場川遺跡調査の別称である。

2 調査は東大阪市教育委員会を主体として同主幹藤井直正が担当し、日本考古学会会員原田昭久、江谷 寛、柏原市立柏原中学校教諭竹下 賢、東大阪市立鶴見小学校教諭奈良英弘の四氏のほか、原田 修君を調査員に委嘱した。また多數の大・高校学生諸君の参加・協力を得たが、その氏名は専案に列記した通りである。

3 出土遺物は、純文式土器片・石器・土製品などかなりの量に上るが、現在その整理作業を進めている段階である。

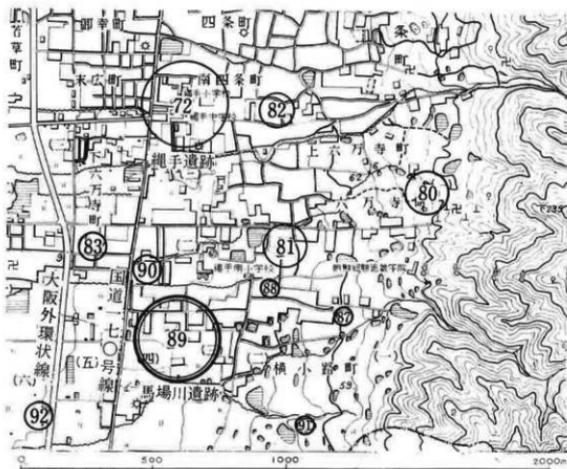
4 本調査概要の結果分担は次の通りである。

調査の経過・まとめ……………藤井 直正
遺跡の範囲・遺跡の状態……………原田 昭
出土遺物……………萩田 昭次

5 昭和44年度の調査については、馬場川遺跡Iを参照されたい。

目 次

はしがき	2
例言	2
位置と環境	4
調査の経過	5
遺跡の範囲	6
遺跡の状態	7
出土遺物	9
まとめ	11
調査参加者名簿	12



第1図 馬場川遺跡の位置と付近の遺跡 (3,600)

位置と環境

尼崎川遺跡は、東大阪市横小路町3～4丁目に所在する縄文時代の遺跡である。近鉄奈良線原山駅の南方約1.5km、南北に通じる国道1号線から300mばかり東へ上ったところ一帯にひろがっている。

遺跡の所在する付近一帯の地形は、生駒山地の一峯岩瀬山から流下する何本もの谷川によって形成された複合扇状地の末端、東から西の方向に向かって下降する傾斜面で、標高18～20mをはかるところに立地している。ここから西方には、恩智川に至るまで漸次ゆるやかに傾斜し、縄文時代には現在の国道170号線あたりまで水面がひろがっていたものと考えられる。遺跡のひろがる地盤一帯は、数軒今まで水田のつく田園地帯であり、その中に横小路の集落が存在しているだけであったが、近年開拓の関係で新しい住宅と工場が立ち並び、市街地化が急速に進んで来ている。

生駒山地の西側を走る東大阪市の東地区（旧枚岡市域）は、府下有数の遺跡密集地帯であり、本遺跡のまわりにも各時代の遺跡が集中している（第1図参照）。まず北方700mには、縄文時代から古墳時代の複合層遺跡である鷺手遺跡がある。この遺跡は、昭和44・45年度に学校建築に伴う調査によって縄文時代後期の遺跡を検出し、多数の遺物が出土した。いろいろな点において本遺跡と関連をもつ遺跡である。

弥生時代・古墳時代の遺跡は六方寺町・横小路町の各所に点々と分布しているが、中でも本遺跡の東北方500mには弥生後期の半穴遺跡、東北方1.5kmには昭和44年（こうぎょく）自動車道の新設工事によって見つかった岩瀬山遺跡²⁾がある。なお弥生時代の土器は本遺跡のH-T-Nの各地点から出土している。古墳・本遺跡の東方300mにある大賀³⁾古墳群のほか、横小路町の東方山麓一帯に散在している。横小路町の南は八尾市域の豪音寺であるが、そこには4世紀に築造された西ノ山古墳⁴⁾の存在する丘陵を望覗することができる。

- 1) 近隣には河内郡横小路村、明治22年以降枚岡村大字横小路とよばれていた村名である。
- 2) 「新潟市遺跡」（新潟文化財伝承地調査報告書5、昭和46年3月参考）。
- 3) 直径約30mの円墳。現在墳丘上に大賀巨神社がまつられている。かつては開闢をめぐらしていたよう、昭和35年その北側で形象埴輪等が出土した。
- 4) 大正14年、開墾中に窪穴式石室が発見され、多数の遺物が出土した学界著名な古墳である。



第2図 N地点の調査風景

調査の経過

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町に所在する縄文時代の遺跡である。昭和42年以降、工場・宅地の建設に伴って縄文時代後期の遺物が出土し、府下における数少ない縄文時代の遺跡として注目を払ってきた。

遺跡の所在する付近一帯は、最近になって工場用地もしくは宅地となり、遺跡が割り失われて行く現状にあるため、本市では昭和44年度文化財保護事業として、遺跡の確認を確認するための調査を計画した。幸い文化財より埋蔵文化財を確認して調査を実施した。この調査の開始直後、横小路町4丁目の敷地約2,300m²に亘って工場の建設されることがわから、急遽この区域うち1,000m²について記録保存はかるための発掘調査を合わせて実施した。この結果、遺跡の範囲がかなり広い面積に亘ることがわから、縄文晩期追賀式に伴う構造や多數の遺物が出土し、本遺跡の重要度を加えることになった。

こうした点から、本市教育委員会では昭和45年度の文化財保護事業として本遺跡の調査を継続して行なうこととした。幸い本年度も国庫及び府費の各補助金を受けることができ、総額800,000円をもって、昨年度につづいて、遺跡範囲の確認を目的とする調査を実施した。

今年度の調査は、これまでに確認している区域の外周部にN～R5カ所の地点を選び、それぞれトレインまたはグリッドを設定し、遺物包含履歴および遺跡の検出率はなかった。さらに昨年度調査したP地点との関係を把握することを目的として、東側に隣接するS地点の調査も合わせて実施した。

各地点における調査の結果は後述の通りであるが、既調査区画を合わせて本遺跡の範囲は東西約300mに及ぶことが明らかになった。また今年度新しくして調査を行なったN地点では縄文時代後期、O地点では中期後半の土器が出土したことは重要であり、本遺跡が從来

来る予想をこえて縄文時代中期から晩期に及ぶ廣域であることを、地点によって時間差が異なることなど、いくつかの問題が提起されることになった。しかし本年度における調査を全般終了ではなく、遺跡範囲の確認を目的とする小規模な発掘にとどめたが、こうした問題の克服は来るべき調査の辺りの課題とともに将来に残していく。

現地における調査は7月18日に開始し、8月28日まで延37日間を費やし、この間大學生、高校生共35人の参加を得た。調査員各氏はじめ、これらの諸君の勞苦に感謝を表するとともに、土地所有者各位、直接間接お世話をなった関係各位に感謝の意を表す次第である。



第3図 Q地点の調査風景

遺跡の範囲

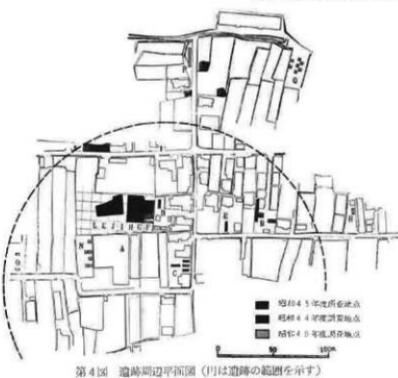
本年度の調査は、とくに天文時代の遺物がどの程度の平面的な広がりを持っているかを確認するための調査として、昨年度の調査地点(F~L地点)より出来る限り離れた地点での遺物、構造の存否を目的として、F~L地点のEを中心にして、南西約80mの地点をN地点、さらにN地点より70m西方の地点をO地点、北方140mの地点をP地点、P地点より北東180m、P地点の東方100mにあるQ地点、東方へ180mのR地点の前5カ所を設定して調査を行なうと同時に、昨年度調査の際、遺構の性格について不明瞭な点を残すF地点の南東部の東に接してS地点を設定し、遺構の確認をとめた(第4図参照)。

本年度の調査は、F~L地点の東西縦を対として北面部の休耕地ないし空地の調査に寄ったきらいがあるが、これは南方部が水田地帯で、時期的に調査の機会が得られなかつたためであり、今後南方部の調査を進めていきたい。

今回の調査の結果、もっとも西に設定したO地点において、これまでに本道路で局部的に検出されていたいた鶴文後削後半の土器群よりもさらに古い、中期朱漆に対する土器群の出土を見たことに加え、N地点での後削初期の中削式に比する土器群の包含は、本道の性格を複雑化し、まるに本道の範囲をさらに西方にこころげる結果となり、所蔵の目的は一応達成された。遺構の西限は、O地点西方の国道170号線(高崎街道)近くまでのびている可能性をもつてゐる。これに対し、もっとも東側に設定したR地点では、まったく鶴文時代の遺物を検出できず、遺構の北限は昭和48年度の調査地点であるB地点(滋賀里式、F地点の東方100m)との間で限られる様

であり、時期的な複合を考え合わせても鶴文後削~後削初期にあたる鶴文遺構として、南北約250m、東西約300mを越える広大な面積を占めることができなくなつた。

一方、道路の北限の確認のためのP・Q両地点では、包含層は奈良時代の須恵器・土器群を含むのみで、鶴文時代の遺物は検出できなかつた。これは、地形的にみてもP・Q両地点が、傾斜した東端部の中でも、いく本にも分かれて走れる谷川の分岐点に近いところに位置し、現在でもP・Q両地点の北に接して小川が流れおり、地形的にもK~L地点より標高が低く、遺構の北限はこの間で限られてゐる感が強い。



第4図 遺跡周辺平面図(円は遺跡の範囲を示す)

遺跡の状態

N地点 昨年度の調査地点(F~L)の南、L地点の西80m、日高鉄工所有の空地のN地点で、敷地は、南北約150m、東西約15m、面積約600m²で、内部に3m四方のグリッドを東西に2列、南北に8列計160グリッドを設定した。この内、I・4・8・12+16の各グリッドを開査した。

グリッドI・4では第3層中に若干の弥生時代後削の土器片を包含し、グリッド6の第4層中(茶褐色土層)に鶴文後削須恵器を包含していたが、他のグリッドでは、ほとんど検出しなかつた。これは、昨年度の調査地であるF~L地点の西、西面の傾斜の地點を西に進み、地形的に稍下に低い滋賀里式土器の出土数が減つていったことを考え合わせると、滋賀里式土器の特徴的西限の位置を示している様に思われる。さらに、本地域の南半部にあたり、6・8・16の各グリッドの6層中に比較的多くの中削式に比する鶴文後削初期の土器群と共に多くの石器を検出し、7層面上において、ピット群を確認した。このピット群は柱穴かと思われ、作居跡の可能性をもつていて、床面の高さ概略18cmを計る。

O地点 N地点よりさらに西方へ約70m離れた地點で、幸いにも休耕地であつたため調査を行なうことができた。試掘は、約450m²の南北に長い敷地の北端と南端近くに、幅2m、長さ4mのグリッドを2ヵ所設定した。双方ともN地点で見られた様な黒色の粘土層は切れていたが、第4層の暗赤色砂質土層中に、鶴文後削後の要素を持つ「埋設不明」土器片約30片を含む。下部は灰褐色の砂層となり、他の時期の土器は検出せなかつた。施山地での高さは概略16.5mを計り、さらに西方へ続く可能性を有する。

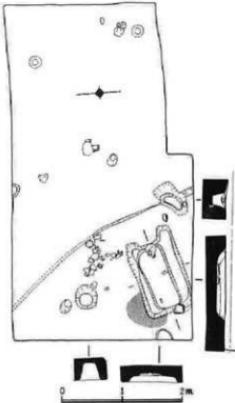
P地点 F地点の北約140mの地點で、F地点からやや西北に傾斜して、狭い谷の谷川の一派流に接している。調査は、約90m²の市有地に、南北に長い幅2m、長さ約20mのトレントを設定した。遺物の包含状態は、奈良時代の須恵器・土器群を含む第4層の茶褐色土層の中で、下層には鶴文・发声時代の遺物は検出されなかつた。したがって、鶴文時代の遺構の北限は、FよりP地点に至る間で切れていると考えができる。

Q地点 本地点は、P地点の東方約100mの面積約520m²の休耕地で、東西に4列、南北に5列、計20ヶ所のグリッドを設定し、調査を進めたが、雨水が激しく困難を極めたため、一応、トレントによる断面観察に重点をしつづけた。Q地点は、現地表を約23.7mを計り、約80cm下に続く第6層の墨色砂質土層中に、P地点と同様、須恵器・土器群を検出したが量は多くない。西、断面の7層上面から幅約120cm、深さ約80cmの溝が走らせてゐることを確認した。P・Q両地点を中心として、歴史時代(奈良時代?)の集落の存在が考えられる。

R地点 遺構の東限を完測する手かりとして、F地点の東方約200mの空地に2×4mのトレントを設定し



第5図 N地点の遺構(グリッド8)



第6図 S地点の遺物分布図

R地点とした。R地点は、これまでの各地点よりも高い標高約26.5mを計る。上層部は、後醍醐時代がひどく、第7層の黄褐色粘土層に至るまでの1.8mを計る各層には、何ら遺物はふくまれていなかった。したがって、遺構の実相が、B地点（滋賀式）と本地点との間に異なることが考へられる。

S地点 本地点は、昨午復行なったA地点の北半分に於て、堅穴住跡を検出したものに対して、南北半分が土偶・土偶勾引などが出されたにもかかわらず、遺構の性質の上において不明確な点を残していたので、F地点の東に接した、中岸治氏宅の空池をS地点として、幅3m、長さ6mのグリットを東西に2列設定、各々S-1、S-2として調査を行なった。S-1、S-2とも第5・6層中に滋賀式の土器を比較的多く包含しているが、形式変が認められ、時節的に分類出来るものである。

遺構としては、第7層にいくつかの抜いビットを検出したが、とくにS-2の西端部が、他の部分よりも黒色で粘質が強く、多量の土器片が右端がふくまれていた。この部分は、調査の結果、約15cmの深さを持つ落ち込みで底面は平底で、溝り形は直線的であり、しかも床面には、振り形と平行に並んで、後約20cm、深さ約27cmの2つのビットを後出し、さらに床面の一帯が約60cmにわたって円形の凹凸面に施されている部分があることなどから、方形の堅穴住跡の一節であることが判明した（第6図）。ここで、特記すべきことは、住跡床面に寝玉を加工した玉頭の断片が残してあり、しかも、それらは一層の白石を除いて、ほとんど穿孔なしの新規中の未製品である。このことは、原石の遺地を遠く離れた当地の集落の中において玉頭の製作が行われた出来を物語るものである。

さらには、玉作りを行なっていた住跡床面を穿って、本遺跡においては初めての土埴輪を検出した。土埴輪は、住跡床面に見られた焼土部の隔壁によって15cmの深さに寄せられているため、土塊の造作は、住居の建造時より遅れるものであるが、住居の使用用途であったのか否かは判断を下せない。

土埴輪は、幅約83cm、長辺1.4mの長方形で、長辺をほぼ東西にあり、長辺は2段作りで、底面はほぼ平道である。土埴輪内には、頸髄骨が焼成的良好に残り、東枕の方角に向っている。頭部の下にあたる部分のみ、土埴輪の頭部を枕状に埋めている。尚、土埴輪と頭骨を連して、大小二点の碧玉状石製品を検出したが、これらは穿孔されておらず、大形の一点は穿孔中であるため、これらの玉頭も土埴輪に伴うものではなく、住跡床面の寝玉製品の未製品に伴うものであろう。



第7図 O地点出土縄文式土器
第8図 N地点出土縄文式土器
第9図 S地点出土縄文式土器

出土遺物

O地点の縄文式土器 O地点から出土した縄文式土器の量はわずかである。この地点はN地点より70m西、標高も考えると約2m下位の地点にあるが、N地点の土器（主として後醍醐一中津式併行のもの）より古い形態と考えられる中期後半の土器が若干出土している。

ただし、N地点下層にも若干中期の上層が出土している。今後、両地点の闇歴を明確にする必要がある。

N地点の縄文式土器 N地点の縄文式土器は、本地点の第3層より第6層まで包含している。第7層以下は不明である。

本地点の第3・4層においては、飛翔一滋賀式併行のものを主とし、縄文後期のものが量を含んでいる。第5・6層において土器の量が多くなり、後醍醐一中津式併行のものを主とし、津浦A式、滋賀K式と併存するものも若干併存している。また、中期後半のものがわずかにある。

中津式併行のものとその他の形式の土器との、各グリッド・各層位における相関関係は、今後、相間図の開整理・分析をした結果改めて報告することにしたい。

S地点の縄文式土器 S地点の縄文式土器は、本地点の第4層より第9層まで包含している。この地点の土器は、昨午復行したE-L地点で出土した滋賀式併行のものと比べて、精製された土器の支撑が、諸説より開拓する沈縄文の文様がほとんどないこと、若干の宮内式に付いた上縁を併存していることから、後醍醐一滋賀式併行式より古く、後醍醐式より新しいと考えられる土器を主として包含している。

また、この地点では、撫状文と直線文の捺模で飾った注口土器と、九州地方古文院期の段状の口縁のついた外型土器が出土している（表団カット）。

土偶 土偶の腰部と思われるもの1点が出土した。

土瓶 土瓶片と思われる破片が出土している。厚みが2mm、復原底径7~8cmくらいのもので、両面とも外縁に不規則な捺模をほどこしている。

眞形土製品 土偶かと思われるが、これまでの出土例がないので眞形土製品とした。中央の作りで、脚部同様

に上部より穿孔をほどこしている。

スランプ型土器類　スランプ型土器と思われるものが1点出土した。表面側面に網文がある。

石錐　すべてサスカイト製である。基部は圓基になつたものと、平基になったものがあり、形状は、二等辺三角形状、正三角形状、五角形状のものがある。底邊を突出したS地點に石錐が多く出土していることは注目される。他の石錐を使用した石錐は出土しなかつたが、色調が乳白色・灰褐色のチャート製片が数片出土した。また星雲石の削片が2点出土した。

石錐　サスカイト製のもの1点が出土した。

石錐　15個の石錐が出土した。すべて、後期一中津式の小器が主として出土したN地點で出土している。15個中13個は砂岩製の扁平な河原石を利用して作成したもので、長軸の両端または一端を欠いている(一端を欠いたものは他の一端に自然の凹みをもっている)直さ90~220g。他の2点は、一つは粘板岩製で直さ28gの扁平な河原石を利用したものの、長軸の両端に研磨による切り込みがある。もう一つは風化のいぢるしい花崗片麻岩製である。長軸をめぐらして研磨による溝がある。直さ30g。

石皿　完形のものは出土しなかつた。砂岩製の自然石を利用しており、両面に磨き、または甲きの作業による磨耗の凹みがある。叩き石とセットにして使用したものであろう。

叩石(磐石一すりいし)　扁平な砂岩製の自然石を利用してしている。上下の広い面に磨きあと、縁に叩きあとを残している。重さ700~800g。石英製のものが1点ある。

菅玉状石製品　2個出土した。1つは長さ2.8cm、直径0.8cm、1つは長さ7.0cm、直径1.2cmを有かり、いずれも蛇紋岩様の石材を原石として表面に磨研を加えたもので、仮名に「菅玉状石製品」とよぶこととした。2個のうち長い方の1個は一端より7~8ミリばかり穿孔を施した形態があり、石材が緩んで全体の穿孔を放棄したように思われる。そのため生じたひび割れが生じている。绳文時代の遺物としてはめずらしい。

菅玉製玉皿　完形のもの1点を検出した。直径1.0cm、厚さ0.6cm、中央を穿孔している。

菅玉製玉皿の剥片　小片であるが數点を検出した。3点は穿孔をほどこし、1点は割れて穿孔のあとをのこし、1点は扁平に加工しているが、穿孔を施していない。

ま　と　め

以上本年度に実施した馬場川遺跡の調査結果を略述したが、これまでの成果に加えて、道跡の範囲や性格について種々の知見を得ることができ、本遺跡の最も重要性をさらに加えることになった。

まず道跡の範囲は、当初予想していたよりも広く、昨年度に全所発掘を行なったF→L地點を中心東西300mに及んでいることが明らかになった。本年度の調査によって、遺跡の北辺および東辺の大よそをわざることができたが、西辺はO地點よりもさらに西方に伸びているものと推定される。これについては、未確認の南辺の調査とともに昭和46年以後の調査に期待したい。

本年度新しく調査を行なったN地點では、上層に施用済質黒式の土器が若干出土し、その下に後期一中津式併行の土器が相当量出土した。またこの時期に伴うものと考られる住居を検出し、住居跡である可能性があるが、全所発掘を行なっていなければ規格・構造等は現在のこと不明である。したがって、このN地點を中心として後期削刃の痕跡が尋ねられること、16個の石錐が出土したことによって塙傍を生業としていた海辺の集落であったことなど、今後解明すべき多くの課題を提示している。またこのN地點で出土した中津式の土器は、府下の鷹文遺跡ではじめての発見例であり、中津式特有の漁巻文に漁巻文を施したものの、比較だけのものとの二種類があり、大部分は生糞山ろく地域神祇の土を用いて灰褐色を呈しているが、中に土色の異なるものがあり、その漁巻文は鷹尾で瀬戸内海地域からかこぼれものと考えられる。

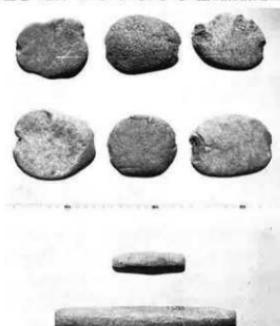
O地點から出土した土器は、中期後半の特色を有し、中に加賀利B式併行のものがみとめられる。これらの資料によって、本遺跡が少なくとも中期後半には存在することが明らかになった。こうして見ると、本遺跡は古い寺廟においては溝辺の竹林に近く、小規模な集落であったが、南北小溝とともに移行し、後期済質黒式の時期にかなりの規模をもつ集落になったことが知られる。

S地點においては住居跡の一部を検出し、この住居跡から菅玉の剥片と玉の未製品が見つかったことも重要なである。菅玉状石製品はめずらしい遺物であり、その機能・性質は今後の検討をまちたい。菅玉状石類は、おそらく既成の原石を手取し、ここで加工したものと考えられ、绳文時代における菅玉の文薫に重要な資料を提供するものである。さらにはこの住居跡の床面を掘り込んだ土壌層が発見され、研磨を施していたが、住居跡と土壌層との関係には重大な問題がひそんでいるように思われる。

以上本年度の調査結果をまとめたが、くわしい検討は後日を期したい。



第14図 遺物出土状態（N地點）



第10図 石錐（N地點出土）
第11図 石錐（N地點出土）
第12図 菅玉状石製品（S地點出土）
第13図 菅玉製玉皿・剥片（S地點出土）

調査参加者名簿

調査補助員

下村和子
本城節子
北野保
大和賢三
川本賀一

早稲田大学
阪南大学
神戸大学
明治大学
大阪市立大学
関西学院大学
立教大学
浪速女子短期大学
大阪櫻蔭女子大学
神戸山手女子短期大学

大阪府立花園高等学校

大阪府立四条畷高等学校

大阪府立山本高等学校
大阪府立八尾高等学校
大阪市立南高等学校
追手門学院高等学校

坂元直哉
上村邦夫
中塚金子
新田洋
永井慶章
永井俊博
星村恵市
山下雅子
津田美智子
今村寿子
今広田みわ
井田和太
正田直行
松井優子
和泉千代
渕水弘江
藤井隆子
松岡良恵
室屋孝史
西村仁士
奥井治郎

岡本和三

片倉加寿子
藤原香代子
出崎真利子
鶴井幹子
安田定子
岡崎茂
鈴木英明
矢野和子

高木武

酒井恵美子
山野恵子
岡崎良子
中島康博
山田喜庸
加地由紀子
高塚成信

平岡房枝
岡村一人
西山宏司
小森尚美
中山大一

ほかに、柏原市立柏原中学校・東大阪市立新喜多中学校・東大阪市立玉川中学校 生徒

馬場川遺跡Ⅱ

埋蔵文化財包蔵地調査概報 6

1971.3

東大阪市教育委員会